

# シニア男性の 地域デビュー 入門



住民流福祉総合研究所

# はじめに

「団塊世代の地域デビュー入門」は以前にも刊行していますが、今回、新しい発想も加えて改訂することになりました。団塊世代が75歳になる2025年が近づいてきて、このテーマにも関心が集まるようになりました。改めてこの課題にどう対処したらいいのか、考えてみました。

□

といっても、私共の発想の基本のところは変わりありません。「地域デビュー」といえば、どんなボランティア活動をするかといったアプローチが多いのですが、本冊子ではもっと角度を変えた発想を提示しています。

□

今のシニア男性は、福祉関係者から見てどんな存在でしょうか。地域資源でもある一方で、実は要援護者という側面が大きいのです。同じ高齢者でも、女性の場合は自立しているし、助け合いもできるので、あまり心配はいりません。心配なのは男性なのです。シニア男性が一人暮らしになった時、妻を介護するようになった時、自身が要介護になった時、いずれも最も心配な対象になります。したがって、シニア男性が地域デビューを考える際、ボランティア活動とは別に、まず要援護者としての自分をオープンにできるか、妻の介護で地域の支援を求められるか、そういうことも重要なテーマになるのです。

□

地域資源という視点では、シニア男性らしい特技や役割があるので、それを前面に押し出した活動が求められています。本業の腕を活かしたり、趣味を入り口に豊かさを追求していく中で地域デビューが果たされたり、意外なところでは、女性主導の活動グループの後方支援役があります。ともすれば男性は地域グループのリーダー役を担うのですが、本当に彼らの力が生きるのは後方支援かもしれません。特に地域活動に不慣れなシニア男性にとっては、最も入りやすい入り口です。

# 目次

- 第1章 「要援護者」から出発／4
- 第2章 婦唱夫随一妻が「デビュー」の道をつける／8
- 第3章 豊かさづくりの「おすそ分け」／13
- 第4章 裏方に回る一後方支援役／17
- 第5章 グループ内で自分の役を探す／20
- 第6章 男性の得意技を生かす／22
- 第7章 自分の抱えた問題に取り組む／28

## <第1章>

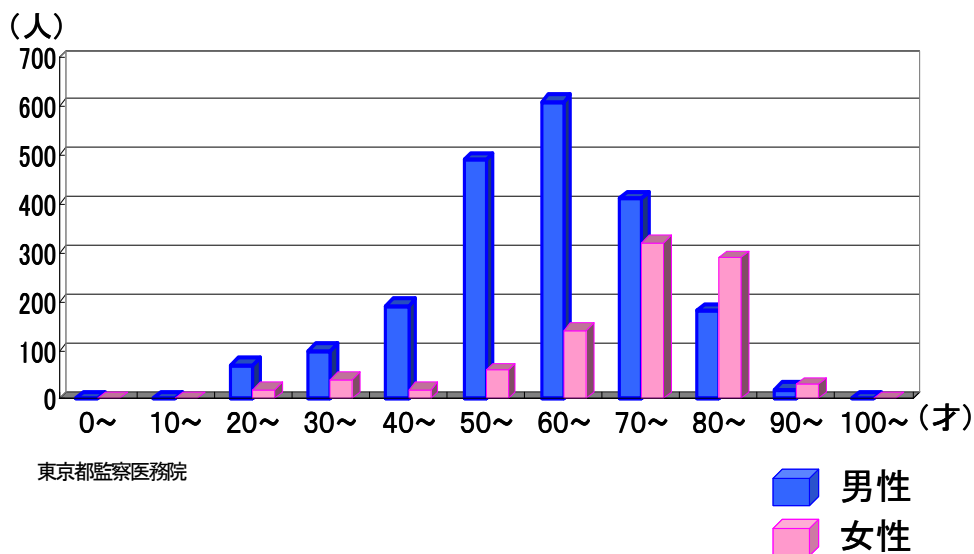
# 「要援護者」から出発

### ■マップで気になる人は「一人暮らし男性」

今、福祉界で最大の話題は団塊世代。特に男性だ。彼らにとっての地域デビューと言えばボランティア活動だろう。むろんそれもいいが、もっと足元にやるべきことがあるのではないかな。

支え合いマップ作りで最も多く話題に上るのが、一人暮らしの高齢男性である。マップでは、気になる人としてまず一人暮らしの人を探すのが、女性はまだあまり心配は少ない。気になる人と言えば、やはり男性なのだ。

食事は毎日コンビニ弁当などで、安否確認しようにも、引きこもったり、周りとの交流を嫌うため、見守りにも苦勞している。



男性は50～60代から引きこもりが多い。その中から孤独死が生まれる。上記グラフは都内の孤独死した人の数である（東京都監察医務院調べ）。家族が要介護の場合、周りが関わろうとすると、大抵の男性（夫や息子）はそれを嫌う。「うちのことは放っておいて」と近隣に言ってくる人もいる。高齢者夫婦の場合も、妻を介護する段になると、夫が妻を困れ込んで、周りの人に触れさせず、そのために周りが苦勞している。行き詰めれば介護殺人の可能性も。

加えて企業人時代から家事をしていないから、料理洗濯ができない。それが突然、

妻の介護までしようとするのだから無茶だ。まずは料理を覚えることから始めなければならぬが、男性が料理教室を卒業後、自宅で料理を始めているという事例にあまりお目にかかれない。

要するにシニア男性は、自身を要援護者として考えてみる必要があり、彼等の地域デビューを語るなら、ここから始める必要があるのだ。

## ■ソーシャル表の「要援護者」の部分に当てはめると…

次頁で紹介したのは、私共が考案した「ソーシャル」一覧表である。これまで社会参加とか社会活動と言えば「ボランティア」という一言で表現してきたが、これではあまりにも範囲が狭く、「ボランティア」をしている人はほんの少数の人に限られてしまう。

人々が社会参加したり、社会活動をするということは、もっと幅広く捉えるべきなのではないか。社会に役立つと言っても、それぞれの立場や生活状況で異なってくる。それぞれが個人的な事情でやっていることを、改めて社会参加とみなしてみたら、こんな一覧表ができた。

今回は団塊世代の地域デビューという観点からこの表を見てみることにする。ここで特に注目すべき項目の■に赤印をつけてみた。

## ■「隠さない」・「助けを求める」も活動だ

団塊世代、特に男性を、この表の「要援護者」に当てはめて考えてみよう。要援護者としてまずやるべきことは何か。まず①「隠さない」「オープンにする」。次いで②「引きこもらずに、周りとの交流する」。この2つをしっかりと実行できれば、周りの人たちはどれだけ助かることか。つまり社会の役に立っているということである。

苫小牧市で民生委員と一緒にマップづくりをしていて、彼等が「気になる人」とみなしている60ケースについて調べてみた。民生委員が気になるというのは、例えば要介護であったり、病弱であったりするのだが、そうした人たちの40パーセントは引きこもりがちであった。引きこもりが気になるのではなく、要介護などで気になるのだが、その人たちの少なからずが引きこもりでもあったのだ。

	負の「ソーシャル」		正の「ソーシャル」			
	⑤悪いことをしない	④社会に迷惑かけない	③公衆道徳		②社会の良識	①社会に貢献
	犯罪につながるようなことはしない。 犯罪を犯させない。	社会に迷惑かけない。 迷惑を受け入れる。 犯罪ではないが、人を貶めることはしない。	市民として守るべきこと やってはならないこと		やるべきことをする。 義務ではないが、実行するのが好ましい。	社会のために進んで良いことをする。
市民一般	<ul style="list-style-type: none"> <li>■万引きはしない。</li> <li>■オレオレ詐欺で再犯せず。</li> <li>■危険ドラッグは吸わない。</li> <li>■ハッカーを防ぐ。</li> <li>■いじめはしない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■企業の社会的責任（公害を排出しない。有害商品の販売を自粛）。</li> <li>■騒音を出さない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■タバコのポイ捨てしない。</li> <li>■交通ルールを守る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■高齢者に席を譲る。</li> <li>■観客席のゴミ拾い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■顧客サービス。</li> <li>■生活の接点で要援護者の支援・見守り。</li> <li>■趣味のおすそ分け</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■企業の社会貢献活動。</li> <li>■各種ボランティア活動。</li> <li>■グループで役割</li> <li>■後方支援・裏方</li> </ul>
要援護者 （家族）		<ul style="list-style-type: none"> <li>■障害や要介護（認知症）を隠さず、地域にオープンにする。</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■引きこもらずに隣人と交流する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>⇒【自立努力をする。】⇒</li> <li>■介護予防に努める。</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>【家で助け合い（介護）】</li> <li>■デイサービスを卒業。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>■周りに積極的に助けを求める。</li> <li>■必要なサービスを行政等に提案する。</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■同じ障害・要介護仲間と助け合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■障害があっても要介護でも社会のためにできることはする。</li> <li>■同じ障害者や要介護者のためにできることはする。</li> </ul>



その次が③「自立努力をする」。自分の食事ぐらいは作ろうということである。次いで④「周りに助けを求める」。

多治見市の春田剛さん（写真）は、母がアルツハイマーとわかったとき、これは大変なことになると察知し、ご近所や知り合いに助けを求めて回った。

その時、事態はまだ切迫していなかった。本人もそれほど自覚のない、初期症状だった。そんな状態の時に、「皆さん、母が認知症になりました」とはまず言わない。あらためてその理由を問うと、「これは大変なことになった。彼女を自分一人では守りきれないのではないか。周りの人にすぎるしかない」と思ったという。

その後、ご近所から朝晩「お母さん、どう？」と声をかけられるようになった。まだ具体的に困り事が出てきたわけでもなく、特別な支援をしてもらってはいないが、「肩の荷が下りた」。近所の人も見守ってくれると知ったことで、楽になったという。「私が彼女を背負いきれなくて放り出したらどうなるかと考えたら恐ろしくなった」とも。たしかにご近所は、今は声かけをしてくれるだけだが、普段、畑でできたものをおすそわけしてくれたりする。「頼っていい相手」だと確信できた。

春田さんがしたことは、本人が考えている以上に意味のあることだったかもしれない。まわりは彼に頼まれるまでもなく、彼の母の症状をうすうす知り、それとなく見守ってはいても、それ以上は手を出せない。だが家族の方からSOSが発信されれば、まさに「解禁」。声を出しても、手を出してもいいのだというサインが出たも同然なのだ。

妻と同じグループに所属していると、妻亡きあとも仲間は支援してくれる。妻が要介護になった時も、大抵は仲間が駆けつけてくれるが、夫がそれを阻止しているので入れないというケースが多い。だから「支援を断らない」というあり方でもいいのだ。

## <第2章>

# 婦唱夫随—妻が「デビュー」の道をつける

### (1)地域デビューの後押し

支え合いマップで、夫が要介護の妻を介護しているケースが見つかるが、多くの場合、夫が妻を囲い込み、他の人の関わりを拒んでいる。妻の友達が心配して訪れても「妻はどこも悪くない」とうそを言って、家へ上がらせない。仕方がないから、夫の留守の時にこっそりと訪問している。

こうになってしまう最大の理由は、夫が地域参加をしていないからである。



その対策としては、夫婦がまだ元気なうちに夫を地域デビューさせるという方法がある。

高知市在住の末永星子(せいこ)さん(80歳)は、4歳年上の夫が退職する前から、彼の地域デビューを仕掛けていた(写真左)。

近くにプールができたので、日曜だけ夫婦で出かけることにした。利用できるのが朝8時と、いやに早い。ならばこれを逆利用しようと、このプールを利用する仲間8人で「モーニングの会」を立ち上げた。近くの喫茶店で一緒にモーニングを楽しもうというわけだ。

その仲間の中に、観光ボランティアをしている人がいた。夫は歴史好きで、どこかへ出かけると、そこにある銅像や遺跡についていろいろ説明してくれるので、夫も観光ボランティアに向いているのではないかと思い、入会を勧めた。



会社を退職後、まもなく町内会長の役が回ってきた。他にできる人がいないことから「仕方なく」引き受けたが、この役は「一回切り」では済まないのが常識だ。他にやる人がいないと、その後も会長役が回ってくるし、交通安全や消防、人権などのイベントがあると会長経験者ゆえに駆り出される。

他方、農協に聞くと、貸農園があるというので、夫の退職と同時にそこを借りて、一緒に畑仕事も始めた。

などと書いていくと、いかにもスムーズに地域デビューしたように見えるが、やはり男性というのは、これだけ多様な活動に手を染めているにも関わらず、それでも「妻の一言」は欠かせないのが実情のようだ。

退職後、会社のOB会にも加入したが、「途中でやめては駄目よ」と釘を刺すことを忘れない。最近も高知市で大流行している「いきいき百歳体操」と筋トレに週2回通うことにしたが、あまり乗り気でない夫を「私も一緒に行くから」と説得した。

この20年、とにかく切れ目ができないように、次から次へと新しい地域デビューのテーマを探し出しては、夫に仕掛けていった末永さん。一時限りではなく、夫を地域デビューさせようという熱意をずっと持ち続けてきたのだ。

## ■退職後1年が勝負

末永さんのやり方を丁寧に分析していくと、かなり理に適っていることがわかる。例えば地域デビューがうまくいくかいかないかは、退職後の1年間で勝負だといわれる。この間に腰を上げないと、その後なかなか地域デビューの機会はなくなるということだ。末永さんの仕掛けは、こう見ると、夫の退職前後に集中している。町内会長やプール、そして観光ボランティア、さらには貸農園など、これらは全部退職直後のようだ。

夫の地域デビューに詳しい人に聞いたことだが、できれば夫には2種類のグループに加わってもらいたい。一つは夫婦一緒に参加、もう一つは夫婦別々に。夫婦一緒に参加というのは、妻の側から推測すれば、それが何を意味するかわかるのではないか。妻を介護する場合に頼りになるのは妻の友達であり、夫がその人たちと同じグループで交流しておくことは絶対に欠かせないのだ。

一方、夫婦別々のグループに参加するのは、夫だけで交友を続ける必要性もあるからだ。「(夫にとって)異性との交流はやっぱり必要だと思いますよ」と末永さんは言う。もし夫の方が長生きした時に、この交流が生きるかもしれない。

末永さんの場合も、基本は「夫婦一緒に」だが、観光ボランティアは夫だけの参加だ。

## ■「私が道を付けた」

末永さんの発言の中で特に印象に残ったのが、「私が道を付けた」という言い方である。

取材の中で彼女はこういう言い方をした。「(夫は) 一人でどうこうすることもしないで…」。

だから妻の私が彼の生き方に(こっちへ行きなさいと) 道を付けた」ということかもしれない。これは別に、末永さんの夫に限らない。男性というのは、長い間企業という場に慣れ親しんでいるうちに、主体的に自分の生きる道を選択し、行動を起こしていく意欲というか、積極性を失いがちになるのかもしれない。

そこで人生の伴奏者である妻が、先のこともしっかり見据えた上で、脇から行く道を代わりに選択し、こっちへ行ったらとアドバイスすることが必要になるようだ。しかし末永さんのように、20年もの間、切れ目なく夫に「道を付けていく」という人は、なかなかないだろう。

## ■夫が要介護の妻を困り込ませてしまうという問題

夫が妻を介護するようになると、夫が妻を困り込み、支援の手を受け入れず、挙句は介護殺人の危険もある。そこで、どちらかと言えば夫向けの心得として、10項目のテストを提示してみよう。

### ①夫婦で一緒にグループに入っているか。

夫が妻を介護する段になって、他人を家に入れない傾向が強いのは、妻の友達と知り合いでないということが大きい。だから、夫の地域デビューの出発点は、妻と共通の友達を持つこと、ということになる。

ところが、「おやじの会」などは、まぎれもなく男だけの会である。これはまずい。例えばサロンなどは男性がほとんど参加していない。別に作るか、親父の会を変えるか、いずれにしても夫婦で参加できるグループを作らねばならないのだ。ときどき夫婦連れでイベントを開くとか。方法はいくらかでもあるはずだ。

### ②食事作り等、家事は夫婦で役割分担しているか。

夫は普段家事もしていないのに、妻が要介護になって、1人で家事も介護も背負わねばならなくなれば、大変なことになる。できるかぎり妻が元気なうちから、家事にも参加しておく方がいい。

親父の会の多くは料理教室から発展したものである。ところが、何年たっても家に帰ってから料理を作るところまでいっていない。これでは意味がない。何としても、自宅で料理を作るようにしなければならない。輪番制で、メンバー宅で食事会を開くとか。せめてホスト役を担った時ぐらいは自分で料理を作るのだ。

### ③お互いの友達を自宅に招待するようにしているか。

たとえばいま述べたことを実行できればいい。まったくの他人を受け入れることは無理としても、おやじの会のメンバーぐらいは自宅に受け入れてもいいではないか。何の問題もない時から自宅開放を始めれば、いずれ要介護になっても同じことができる。

### ④夫婦でできないことは、よそ様に助けてもらっているか。

すでに妻を介護中のメンバーもいるはずだ。一人暮らしで食事づくりに苦勞している仲間もいる。そのとき仲間に助けを求めたり、助けに馳せ参じることができるようになればいい。男性というのは、そういう問題を抱えても仲間に言わないし、仲間もそれに触れないようにしているが、これではなんのためにおやじの会を作ったのかわからなくなる。妻を介護中の仲間や、一人暮らしの仲間を支援すること、これをメインの活動にすべきなのだ。

### ⑤夫に町内会役員などを引き受けるよう働きかけているか。

仲間の地域デビューを、おやじの会のほうから働きかけるのはどうか。妻の言うことは聞かないという場合も、仲間の言うことなら聞くかもしれない。

おやじの会だけでなく、様々なグループに所属するように会として働きかけるのも、いい活動である。町内会の役員などは、おやじの会のほうで引き受けていくぐらいの意気込みがほしい。

### ⑥夫にもライフワークを持つようアドバイスしているか。

定年退職するまでにライフワークを持っていないと、退職後はズルズルと日々を

過ごすようになる。おやじの会に入った時はすでに退職しているだろうから、これから改めてライフワークを持つように勧められるのは、おやじの会ぐらいではないか。お互いのライフワークを披露し合い、発表し合うようなグループになればもっといい。

### ⑦子供夫婦と近居できるように提案しているか。

近居が流行している。同居は難しくても、近居ならハードルが低い。しかし親子の関係の濃淡によって、なかなか実現しない場合もある。

自分からは言えないが、おやじの会から息子さんに働きかけてあげるといったことはできないか。他人だけど、身内に近いという関係を生かして、家族関係の中に踏み入るのも、大事な役割ではないか。

### ⑧我が家を近隣の溜まり場にしているか。

まずはおやじの会のメンバーを受け入れることから始めたらどうか。会合は自宅開放型でやるようにしたらいい。同じ趣味を持つとか、同じ活動を担うことになった仲間と自宅で打ち合わせするとか。

### ⑨夫婦で介護グループに参加しているか。

介護グループに所属していれば、夫婦のどちらかが要介護になったとき、支援に来てくれる。残念ながらおやじの会には、そういう人材がいない。いるとすれば、メンバーの奥さんだろう。

だから、おやじの会が組織ぐるみで介護グループと連携し、お互いができることをし合う取り決めをしたらどうか。おやじの会はメンバーがそれぞれ本業の腕を持っているから、それを生かして介護グループの役に立つことができる。

介護グループから介護技術を提供してもらうだけではなく、夫が妻を介護する時のために、実践的な介護研修もしてもらったらどうか。

### ⑩夫婦の対話はいつも絶やさないようにしているか。

男性だけでは大介護時代は乗り切れない。妻と二人三脚で進む以外にないのだから、阿吽の呼吸でいつでも連携できるような夫婦になっておくことが大事だ。

## <第3章>

# 豊かさづくりの「おすそ分け」

### ■豊かさ満開を実現させようと思えばいい

定年退職後の生活を冷静に見てみると、現役時代とは比べようがないぐらい、豊かさ実現に有利な条件にあることがわかるはずだ。

人が豊かになるということは、どんな条件が具備されたらいいのかを調べてみたら、次の6つの項目が浮かんできた。

①仕事・経済、②健康、③趣味・学習、④家族・夫婦、⑤友だち、⑥ボランティア、社会活動。

今までは、一日の大半を「仕事」に費やさなければならなかったため、その他の項目のほとんどを犠牲にしてきた。これからは、仕事の方は適当にしながら、他の項目も併せて充足させられる。本気で豊かさ満開を実現したいと思ったら、容易に果たせるのだ。実際にその努力をした人は異口同音に言っている。「こんなにたやすく豊かになれるとは、信じられない！」と。

### ■6つの項目を相互関連で充足させること

ただし、それには条件がある。この6つを個々バラバラに追究するのではなく、これらの相互関連の中で豊かさを実現させようとするのである。この中の、一番入りやすいものから取り掛かる。それを豊かにしていく中で、他の項目も併せて充足させるようにすればいい。一石六鳥作戦だ。

例えば家庭菜園で野菜作りをしたいとする。その成果物をご近所に配り歩く。新人に手ほどきする。仲間と交流する。あるいはその野菜を料理して飲み会を開く。菜園活動を題材に短歌や俳句、写生を楽しむ。などというふうに、他の項目の充足へ向けて、絶えず手を広げていく。

こうすれば、家庭菜園を通して、豊かさへの6つの要件をすべて充足できることになる。「地域デビュー」は結果として実現していることがわかるだろう。

とすれば、各自、豊かさ満開への総合作戦を立てて、それを実行していけば、自

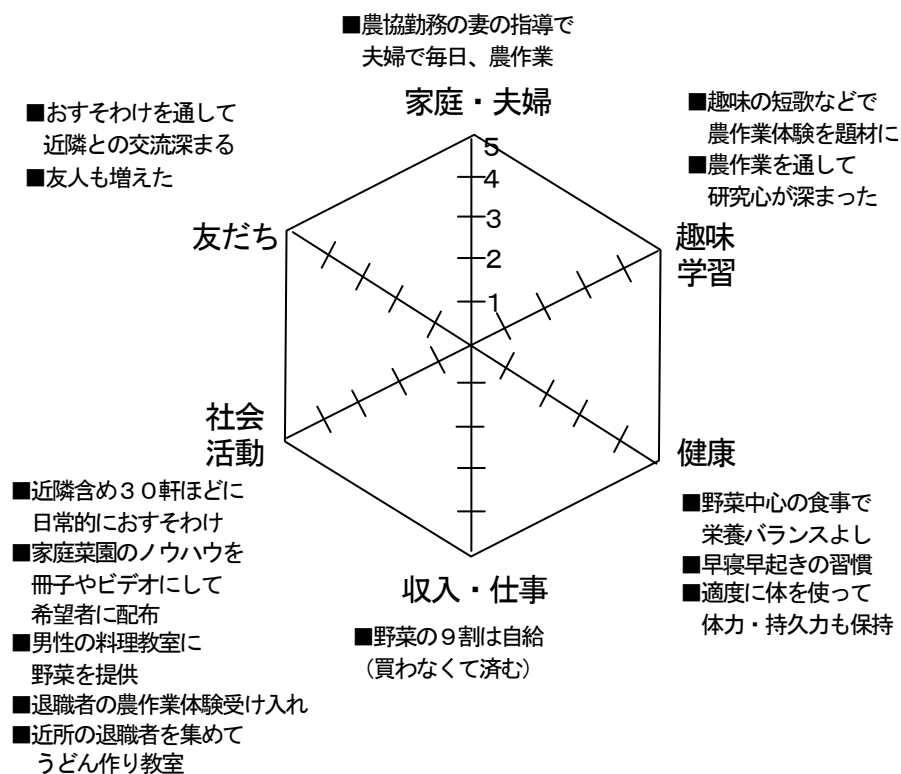
身に最もふさわしい「地域デビュー」の道が見つかるということなのだ。

## ■こうして豊かさ満開を実現した人も

要援護者の一人としての社会的な営みとは別に、もう一つの流れがある。こちらは文字通りの社会活動だが、これまで企業社会において、社会活動をする機会が全くなかった男性たちはどこから地域へ踏み入ったらいいのか。

彼らが退職してすぐ始めるのが趣味活動である。これは専ら自分の楽しみのための活動だが、やり方によってはここから社会活動に入ることもできる。そのコツを身に着けている人もいる。

定年退職後に近くの農家から畑を借りて家庭菜園を楽しむ人は多いが、Yさんは本格派だ。跡取りがいなくて畑を遊ばせている農家から、思いきって4百坪ほどを借り受け、以前に農協に勤務したことのある細君の指導で30種以上もの野菜を作った。「プロに負けるな！」と害虫駆除から雑草取り、連作が向いている作物やその逆のものの区分け方、いつごろの播種がベストなのかを、毎日農業日誌をつけながら研究している。



そうやって大量にできた作物を、30数軒に配り歩いている。近隣だけでなく、遠くの知人には宅急便などで送る。枝豆ができると、夕方に収穫したものをそのま

ま持って行き、「今晚、これをつまみにビールを」と、味なおすそ分けのしかたもする。地元で男性の料理教室が開かれたりすると「畑のものはどれを使ってもいいですよ」。

こうやって蓄積した農作業のノウハウを、おすそわけすることも忘れない。自作自演のハウツービデオを制作。公民館の生涯学習講座などに招かれて講義をする時も、このビデオを使う。

## ■ダイヤグラムに載せてみると

本研究所が紹介している「豊かさダイヤグラム」を思い出された方もあるのではないか。①仕事・経済②健康③趣味・学習④家族・夫婦⑤友だち・ふれあい⑥社会活動の6つの項目を要件とした、あのダイヤグラムである。

Yさんの生活内容をのせると、彼は農業を通して、見事に豊かさ満開を獲得している。野菜の9割を自給できているから、家計への貢献度は高い。健康は、早寝早起きで畑仕事だから、体には大変いい。趣味は農業。毎日夫婦一緒に農作業。友人は限りなくいる。社会活動も多彩だ。つまり自身の豊かさ満開を求めて、このダイヤグラムの全体をついでに豊かにしようとしたら、結果として⑥社会活動をしたことになった。

## <第4章>

# 裏方に回る－後方支援役

### (1)キーワードは「後方支援」

後方支援という言葉がある。これこそシニア男性の地域活動デビューに最も適した入り口かもしれない。すでに述べたように、定年退職したばかりで地域を知らない団塊世代が、地域活動のリーダーシップをとろうというのは無理がある。地域はそんなに甘いものではない。妻たちが何十年もかけて試行錯誤しながら積み上げてきたものである。

男性たちは女性に比べてコミュニケーション力に欠けるだけでなく、福祉ニーズの発掘の仕方、活動の仕方、ネットワークの作り方などのいずれの面でも、まだまだ主導権を握るには未熟である。

その男性たちに期待されているのが、後方支援という視点なのだ。女性たちの活動に不足している部分を、男性ならではの能力と経験を生かし、後方から上手に支援するのである。

### ■女性の活動のパーツを担う

最前線の活動とともに、その後方支援の活動も大いに社会の役に立つ。シニア男性の場合、このあり方が向いているのではないか。最前線は女性に任せて、その後方支援に回るのだ。

ある女性主体の活動グループに男性が数名参加していた。その男性たちがやっているのは、写真撮影、音響設備などの設定や補修、会議資料の作成など、裏方のことばかりであったが、そこにやりがいを持って楽しんで活動していたのが印象的であった。

面白かったのは、女性だけの会議というと、男性がやるようには整然とは進まない。あちこちでおしゃべりを始める。会議場が騒然となった頃に、ようやく司会者が叫ぶ。「みんな、黙って！」



それも長くは続かない。またおしゃべりが始まる。そんなときに後方支援の男性群から声がかかる。「議事進行!」。会議運営もまた男性の役割なのかもしれない。

## (2)フォローアップ専門グループ

### ■ケアセンターで必要とされている活動を

重岡昭男さんが主催した「鶴の恩返し」という名前のサークルは、横浜市鶴見区のある地区のケアセンターが開いた男性向け介護講座の受講生たちによって結成された。受講生の少なからずが、すでに要介護者を抱えていたので、この際なんとしてもグループを作りなさいと、講師の私が強く進言した。それを実行したのが重岡さんだった。

グループができて、まず何をしたらいいだろうかと考え、とりあえずはこのケアセンターで必要とされている活動をしようと考えた。

まず、「日帰り介護補助」。まだ働いている仲間も参加できる活動にするため、休日にデイサービスの手伝いをしようというものだ。

次いで「広報紙の発行」。ケアセンターはつくられたばかりで、まだ広報誌の発行もできていなかったもので、それを全面的に請け負った。取材・編集・印刷・配送の全てをこなし、しかも各戸配布であった。

3番目が食事の配達。この活動のために高齢者宅を訪問していて、気になることが出てきた。「年をとると、若いときに簡単にできたことができなくなるんですよね」。一人暮らしをされていて、いろいろ不便なことがあるのではないかと。

そこで弁当に手紙をつけてみた。「なにか困り事があればお手伝いします」と。すると出てきた。「植木の刈り込みをしてほしい」「障子やふすまの張り替えをしてほしい」「草取りをして」「手すりをつけて」などなど。

これらの困り事に対応したのが、「おたすけまん」活動だ。あるとき保健師から、「リハビリのために集まる区内の高齢者や障害者の送迎を頼めないか」という依頼が来た。初めは車が不足していたが、日本財団からリフト付きの車両が、また障害者から「お世話になっているから」と中古の車を寄贈された。

### ■ワープロを完全習得するまで面倒を見る

「ワープロ・パソコン教室」は、脳血管障害者のためのリハビリと職能訓練を兼ね

た技術習得教室だ。区報でボランティア募集があり、それに乗ったのである。講習と補助と送迎が彼らの主な仕事だった。

教室は3ヶ月で終わりだったが、受講生はまだワープロを使いこなせる段階までいっておらず、それが気になった。「これで突き放したのでは、無責任ではないか?」。そこで重岡さんは中古のワープロを集め、受講生が本当に使いこなせるようになるまで、今度は「鶴の恩返し」として教室を独自に開催することにした。この「仕上げ」コースに3ヶ月かかったが、「これで手放したのではまだ不十分」と感じた。一応ワープロが扱えるといっても、すぐさま仕事になるほど甘くはない。それに、彼らは重い障害を抱えている。

そこで、彼らに自主的にグループをつくらせることにした。1年目の生徒はまだそこまで意識が高まっていなかったが、翌年に引き受けた生徒たちでようやく目指すグループが生まれた。そして、「まだ手を放すわけにはいかない」と、今度は彼らのための作業所づくりをしようと考え、ワープロ以外にも授産項目を増やすために様々な実習を始め、区にも作業所建設を働きかけていった。

## ■他の組織が振り落とした部分をフォロー

彼の活動の中味は一見複雑なように見えて、じつは、首尾一貫している。たまたま見つけた1つの「活動」をとっかかりにして、その未充足の部分をフォローするというものだ。行政にしても、一つの事業をしたら、それでどれだけの成果があったのかという点検もなしに、事業としては終了してしまう。それではおかしいではないかと、重岡さんがその後を受け継ぐ。また他のグループの活動を支援しながら、その活動が振り落とした部分、気がつかない部分をまたまたフォローするという具合である。

「後方支援」という言葉があるが、そういう一般的な表現では、彼のやっていることの意味を正しく伝えることにはならない。時代小説を読んでいると、「後詰め」という言葉が出てくる。上意討ちなどに行く場合、先発隊が討ち漏らしたときに、すぐさま後を追って討ち果たす、という場合に使われているようだ。重岡さんのやっていることも、単に後方支援というよりは、この「あと詰め」に近いという気がする。

## <第5章>

# グループ内で自分の役を探す

### (1)自分の特技でグループに貢献

東京都社会福祉協議会が実施していた動物園ボランティア（正式には「シルバーガイド」）の参加希望者向けの研修会が開かれたことがある。

私もその1コマを受け持ったが、講座の担当者に聞いてみると、活動の内容を知るにしたがって「私には合わない」と、以降の参加を辞退する人もいるという。

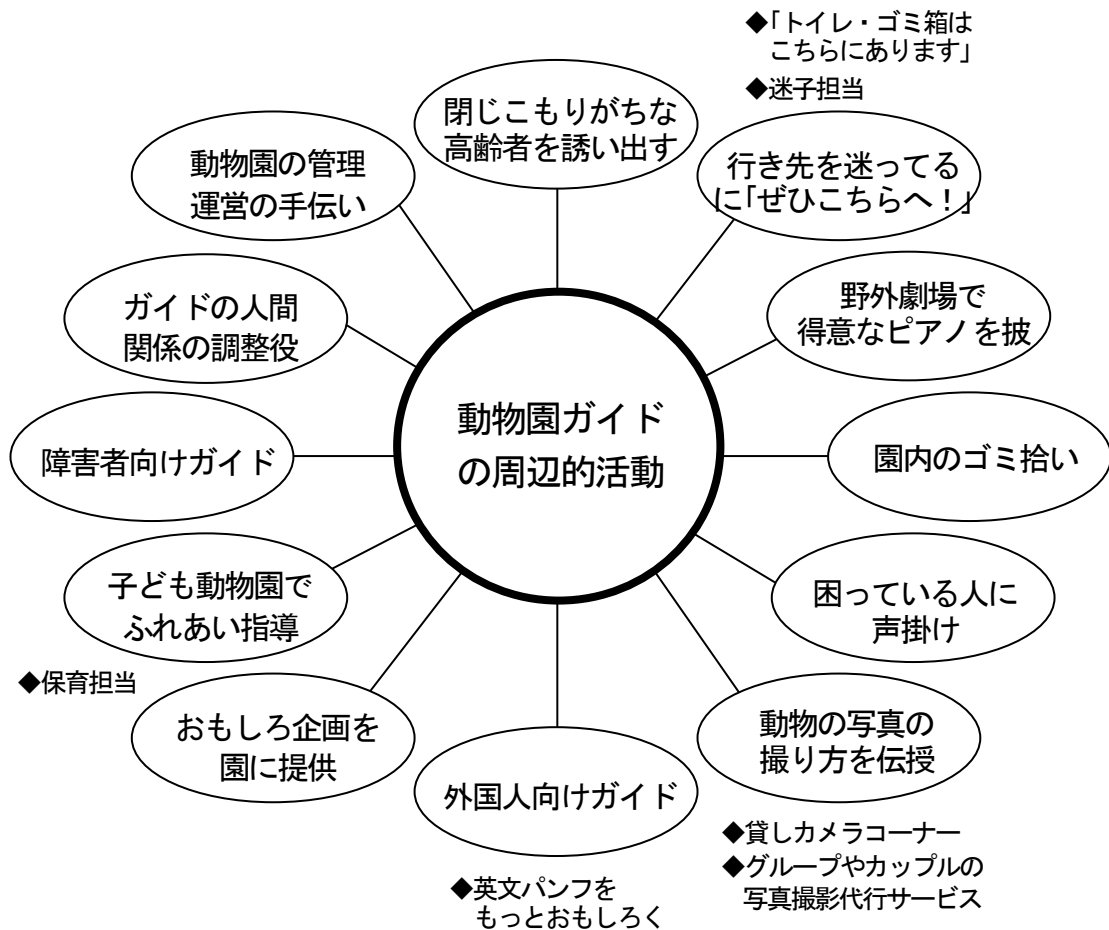
そこで私は受講者にこんな作業をやらしてもらった。自分の持ち味を生かしてどんな活動を園内でしたいのか、そのアイデアをいくつでもいいから出してもらおうというものだ。

男性の受講者は、動物園と自分の特技（趣味の技術も含めて）を結びつけた活動のアイデアをひねり出していた。職業柄、外国語に堪能な人は「外国人向けのガイド」をしたいとなるが、「英文パンフを見たが、もっと面白くできるのではないかと、そっちの方に自分の能力を生かそうとしている人もいた。

広告代理店に勤めていた男性は、車椅子でも見学できるコースを設けたらどうか、電気自動車を走らせたらどうか、スポンサー付きの風船や傘なども作ったらどうかなど、次々とアイデアを考え出していた。会社で管理職の立場にいたからか、動物園の管理運営のアドバイスをしたいという声も目立った。

その他にも、カメラ好きの男性が、動物写真の撮り方を教えたいと提案していた。彼に言わせると、今のカメラはみんなオートフォーカスになっているから、これで写すと、いつも動いている動物の顔はぼやけてしまう。自分で焦点を合わせるカメラでの写し方を教えたり、カメラ自体を貸し出すのもいい、と言っていた。

「動物園ボランティアだから、見学者に動物のことを教えるだけが活動だ」などと決めつけなければ、こんなにも「周辺的な活動」テーマがあり得るものなのだ。シニアが地域の活動グループに加入する場合、とりあえずは自分の腕が生きる部分を、その主たる活動や従たる活動の中から探し出せばいい。



## (2) 「とりあえずグループ」を作る

生涯学習講座などに参加した場合、講座が終わった後に、そのまま解散というのではなく、何をするかは決めなくても、とりあえずグループを作ったらどうか。

何度か会合を重ねている間に、一人ひとり、本命の行き場が決まってくる。実際に、一年たったら全メンバーの行き場が決まっていた。

といっても、元の「とりあえずグループ」もそのまま継続していくといい。男性は女性ばかりのグループに加入すると、ときどき男性だけのグループに戻って、一息つきたいものなのだ。こうやって、いわば母船とキャッチャーボートの間を行き来することで、男性にとって、精神衛生上良好な状態が生まれるのだ。

東京都A市に熟年男性だけのボランティア・グループが誕生して丸1年。社会福祉協議会主催の「熟年男性料理教室」に参加したメンバーを中心に37名で構成され、その多くが他の活動グループにも掛け持ちで参加しているのが特徴だ。

会社人間で通した男性は、地域での人間関係はゼロに等しい。なにか活動をと

っても、きっかけさえつかめない。ヒマに飽かせて市の広報を読んでいたら、「熟年男性」の文字が目に入る。

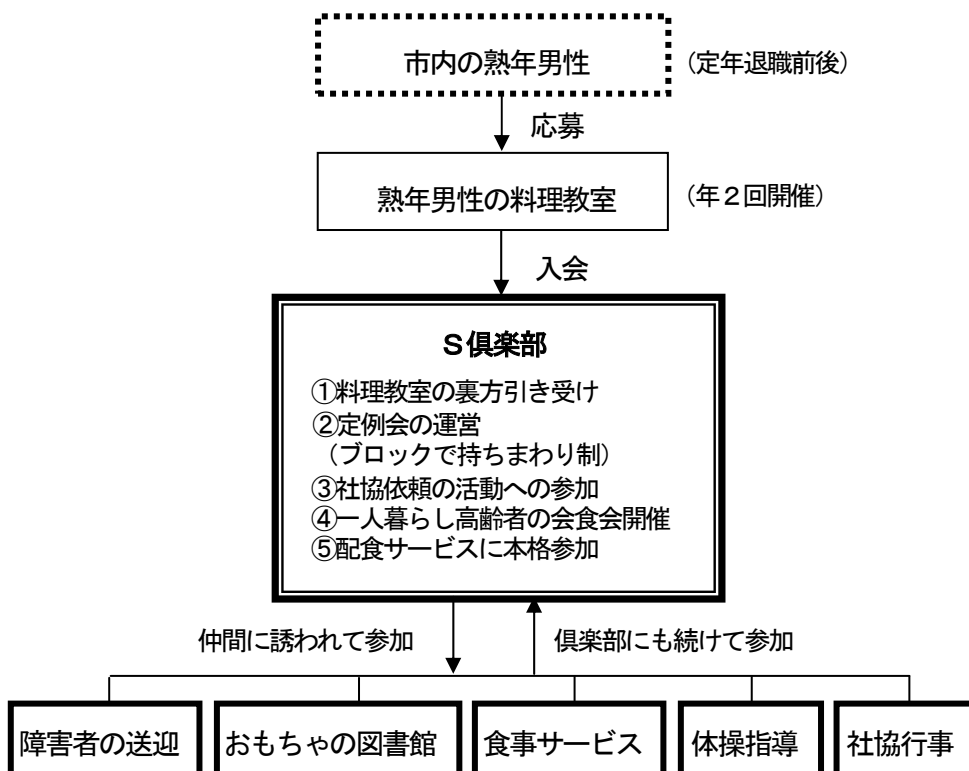
「とりあえずは」と料理教室に参加してきた人たちで、終了後にまた「とりあえずは」とグループ「S倶楽部」を立ち上げた。

まず、お世話になった料理教室の裏方を引き受け、奇数月開催の定例会の運営を地区の持ち回り制にして、人間関係を深めさせた。親しくなった仲間から「一度来てみないか」と誘われて、もう1つの活動グループにも顔を出す。

今ではメンバーの多くが、障害者の送迎、おもちゃの図書館、配食などの活動に掛け持ちで参加している。

「男女席を同じうせず」で育った世代には、女性中心のグループでは心が落ち着かない。男性だけで語り合える「S倶楽部」も捨てがたいと、しっかり通ってくる。

なかなか地域社会やグループに馴染めない男性のために「とりあえず」入れるグループをつくる。そこから仲間に誘われながら徐々に本命のグループを見つけていく。しかし、「S倶楽部」も大切。空母に帰ってくる艦載機みたいなものだ。



## <第6章>

# 男性の得意技を生かす

### (1)元企業人だからできることとは

男性はグループの中でどんな役割を果たせるのか。こんな話がある。男性の料理教室を卒業した人たちで新たに活動グループを立ち上げた。その発会式に招かれた社会福祉協議会の事務局長が、男性の役割について改めて見直したと言っていた。

まず発会式の進め方が見事である。それはそうだ。彼らは何回となく企業で会議運営をしてきた。それだけでなく、活動企画もなかなかいい。経理などは社会福祉協議会の経理など恥ずかしくて見せられないほど見事なものだった、と。

地域のグループは、大抵は女性主体で成り立っている。そこで欠けているのがこうした資質ではないか。つまり今の地域グループの欠けている部分を男性が埋めることができるということを事務局長は発見したのだ。

### (2)元企業人が持っている4つの顔

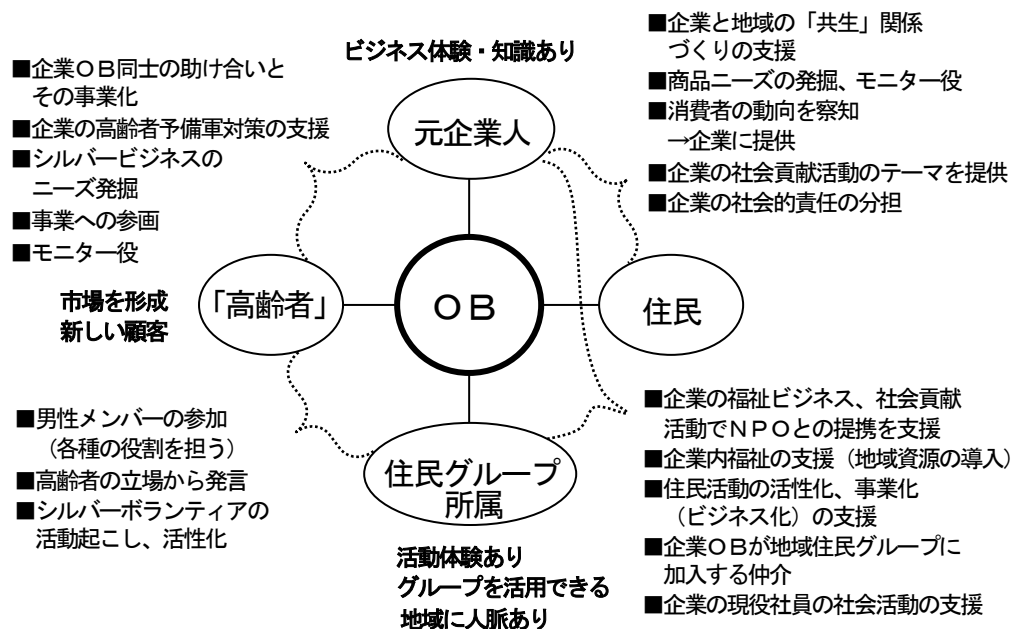
#### ■現役時代は1つの顔しか持っていなかった

そもそも企業OBの持っている能力・資質とは、どういう点にあるのだろうか。企業人時代に培った様々な資質、例えば会議運営とか組織作り、その維持、事業等の企画、いろいろな計画作り、経理や資料整理、情報処理などの技術が、地域の団体に所属した時に生きてくるといったことを思い浮かべるだろう。

彼らが企業人であったという事実だけでなく、地域の住民グループ（自治会や各種趣味やボランティアグループ）に所属していること、高齢者でもあること、住民の1人でもあること（生活者であり、企業から見たら消費者でもある）の相乗作用が、彼らの可能性を倍加させている。図をご覧ください。彼らは4つの顔を持っている。現役時代は、「企業人」であるしかなかった。

## ■地域の消費者動向を企業に提示できる

企業OBが現役に比べて有利な点は、彼らは企業人であった（企業活動にともなう様々な能力を蓄積している）とともに、地域住民にもなり、地域グループにも所



属していることにある。4つの顔を持っていることで、彼らは現役時代以上に社会の役に立ち得る立場になった。

4つの顔を持つことでどういう役に立てるものなのか。たとえば、元企業人と地域住民の顔が重なると、消費者のニーズを把握し、企業にそれを提示することができる。自分も消費者であるし、消費動向を元企業人として分析できるからだ。企業はどのような社会貢献ができるのか、2つの顔を使って考えることもできる。企業が社会にどんな迷惑をかけているのかも、消費者の立場になったらよく見える。それを企業に示唆することもできる。

元企業人であると同時に地域グループに所属していることから、可能性が生まれてくる。地域グループと企業とを結びつけることができるし、グループの活性化に役立てることもできる。彼らはグループ運営に不可欠な様々な技術を併せ持っている。会議運営や事業企画、情報処理、経理などだ。

地域へ戻ってくる企業OBたちを地域グループにつなぐ役割も果たせるし、現役の企業人と地域グループを結びつけることもできる。共同で社会活動をすることが、彼らの仲介でできるかも知れない。企業の現役の社会参加をとりもつこともできる。

地域グループに所属しているから、社員向け介護教室を開きたいと思えば介護グループを紹介すればいい。

## ■「企業人」と「高齢者」の2つの顔が重なると

彼らが高齢者あることも大事な要素だ。老人会にも加入し、この組織を活性化している元企業人もいる。まるで会社組織にいるのと同じ気分で、老人会を切り盛りしている。

高齢者の目から企業が生み出す商品をチェックすることができるから、シルバービジネスのニーズを発掘したり、高齢者の立場から商品のチェックができる。

これから企業を退職する人たちにシニアとしての心構えや準備のあり方などを教えることもできる。

高齢者同士の助け合いでも、彼らが企業人であったことが生きている。ナルクというシニア組織は、大手企業の労働組合の幹部だった男性が、その人脈をフルに活用して、あっと言う間につくってしまった。

## (3)サラリーマンの意外な特技「魚の骨」

### ■「まちの課題をマップで探してみよう」

安城市社会福祉協議会では、2回シリーズの勉強会を、市内の3地区で行った。1日目は『住民支え合いマップをつくろう』をテーマに、町内会ごとのグループに分かれ、住宅地図上で住民のたまり場やつながりを線で結ぶ作業。2日目は『まちの課題をさがしてみよう』をテーマに、マップづくりから浮かび出た課題について、何か一つでも事業計画を立ててみるという内容だった。

3つの地区は、市街地を中心とした地域、純朴な農村地帯、新興住宅やマンションを多く持つ地区というように、それぞれ地域性が違い、地域福祉活動の進め方にも個性があり、発表された内容も災害時の避難経路の問題、ゴミステーションの問題から、住民のふれあいの場づくり、徘徊している認知症の問題など、町内会ごとに違った内容でこちらが予想した以上に興味深い結果が出た。

限られた時間の中での集中した作業で、始めはみんなで模造紙を囲んで黙っていた参加者も、いつしか意欲的にペンを握って書き出していた。

参加者の感想でも「町内のことをみんなで集中して話し合えて良かった」という



声が多く聞かれ、『まずは住民同士で話し合うことから地域づくりはスタート』という基本的なねらいに触れることができ、主催者側としてはまずまずの手ごたえであった。

今までの活動スタイルでは、町内の福祉委員会がスタートしてしまうと、ふれあいサロンなど定番の行事を開催することだけに視線が移ってしまい、当然会議を持っても、そのための話し合いだけに終始し、自分たちの困り事など足元の課題を見ることが抜け落ちてしまいがちだった。今回の勉強会では参加したメンバー同士の「気になること」を話し合うことができ、その大切さに気付くことができ、有意義なものとなった。

さて、町内会ごとの作業結果の発表の中で、こういった勉強会では珍しい『魚の骨の図＝特性要因図』（問題の原因を整理し、関連づけを明確にしていく手法）による発表が2つの町内会からあった。職場のQCサークルで問題の原因を追求していくための一つの手法であるが、私も以前、職場でQC (Quality Control) の研修を受けたことがあり、この図を久しぶりに地域福祉活動の勉強会の場で見ることができ、何故か新鮮さを感じた。

聞いてみると、作成者は2町内ともトヨタ系企業のOBであった。勉強会が終わってから地区の会長さんにも話を聞くと、「トヨタ系の会社ではみんなやってるよ。特に製造現場の発表内容がおもしろいよ」と話してくれた。

## ■ 「みんなQCサークルをやっていた」

安城市や隣接する豊田市をはじめ、この西三河地方は製造業の中心地であり、住民の中には当然これらの企業にお勤めの方もたくさんいた。

そんなことに今さらながら気がついて、まわりのボランティアさんなどに「QCサークルやってた？」と聞くと、ほとんどの方から「やってたよ」とごく当たり前のことのように返事が返ってきた。

数人の方に詳しく聞いてみると、会社や職種によつての違いはあるが、ほとんどは職場単位でのグループで問題点を見つけ、それを改善するために定期的に話し合いを行い、3、4ヶ月か半年ごとにサークル活動の発表会を行うとのことであった。優秀なサークルは全国大会にも参加するそう。

職場の全員が参加し、問題意識、改善意識を共有化し、仕事の品質を高めるといった活動であるということがわかった。

## (4)福祉機関に欠けているのは経理だった

### ■障害児とのふれあいもいいが…

以前、人事院の総裁が障害者の小規模作業所を訪問して、ボランティア体験をしたというニュースがあった。一緒に作業をするなど、よいふれあい体験ができたようで、「また行きたい」と洩らしているようだ。これが、昨今の「ボランティア」の常識的な行動パターンだろう。

むろん、それはそれでいいのだが、本研究所ではもっと別の角度からの「ボランティア」活動を考えたいのである。せっかく企業マンが作業所でボランティアをするなら、だ。

恰好の事例が札幌市で見つかった。同市に住む中澤靖吾さんを紹介しよう。彼は王子製紙に永年奉職。定年退職以降も系列会社の役員や系列病院の事務長などを経て、今から数年前、「会社」という所から完全に手を引いた。

しかし、そのまま「悠々自適」と満足しているような人ではない。「何もしなければ槍が錆びる」と、自分の出来ることを求めて、まずシルバー人材センターに出向いた。ところが、センターの担当者が彼のきらびやかな経歴を見て仰天し、「あなたはこんな所に来るべき人ではない」と門前払いを食わされた。

それではもっとボランティア的な活動はないものかと道庁に行くと、ボランティアセンターを紹介された。そこでたまたま、障害者の小規模作業所で帳簿つけのボランティアを求めていると聞かされ、応募。これが彼のその後の運命を決めた。

引き受けてみて、驚いた。本来は「社会福祉簿記」を整備することが求められているのに、それどころではない。現金の出し入れがやっという「ドンブリ勘定」。みんな有志の若者たちだが、経理のことまで手が回らないというのが現状だ。それはわかるとしても、こんな状態では困る。少ないとは言え一応、国からも補助金が来ているわけだから、最低限の経理はしなければならぬと孤軍奮闘し、なんとか収支計算書や貸借対照表を整備するまでになった。

そこで彼は悟る—福祉関連の施設や団体の盲点というか弱点が、この経理にあることを。そして、彼が会社時代に磨いた経理の腕が、そこにピタリ生きるということも。

## ■数施設をまとめて面倒みよう

事情はどの施設も同じ。となると、1つの作業所にいつまでも関わってはいられない。そこで、経理のできそうな職員を1人見つけてきて、手ほどきした上で引継ぎ、自身は他の作業所へ「移籍」。こうやって今、引き受けているのはもう4施設目になる。今後、他の数施設を対象に、とにかく最低限の現金出納を記帳しておき、決算期にこちらで決算の手続きをしてあげようかとも考えているところだ。

しかし彼は、ただ経理だけに自分の活動領域を絞っているつもりはない。福祉施設が経理に疎いということが、他の面にも悪影響を与えていることがわかったのだ。経理をきちんとしないと、施設運営の様々な面でルーズなところが出てくる。彼に言わせると、経理とはそういうものだそう。

作業所の職員に聞いてみると、たしかに中澤さんは、帳簿つけや経理の指導だけをしていたわけではなかった。ある職員はこう言っている。「一般の企業と比べて福祉施設に欠けがちなところを彼が指導してくれますし、経営の指導までしてくれるんですよ」。

例えば、若者たちが仲間意識を持って仕事をするのはいいが、ともすると組織としての基本原則を踏み越えて、だれがリーダーかわからなくなってしまう。彼は意図的に所長をたてるようにして、暗に他の職員に「最低限度の秩序は守るもの」と諭すのだ。

所長が新しく職員を雇おうとする時なども、ちょっとしたアドバイスをする。財政が苦しいと知ると、彼が長い間に蓄積した人脈を生かして、たとえばライオンズクラブから寄付を引き出すなどしている。

## <第7章>

# 自分が抱えた問題に取り組む

### ■自身や家族が抱えた問題に関わることから出発してもいい

地域デビューと言えば「ボランティア活動」という言葉がすぐ浮かんでくる。たしかに、そういうケースが多いのだが、しかし視野を広げれば「デビュー」の入り口は、もっと多様であっていい。結果としてそれが「ボランティア」活動になるとしても、出発点は例えば自身または家族が抱えた問題に関わるということであっていいのだ。じつはシニア男性が地域活動に踏み込むきっかけとしては、このケースがかなり多いとみるべきかもしれない。

あまり考えたくないことではあるが、例えば子どもが犯罪被害に遭ったり、あるいは交通事故に遭ったのに、犯人が捕まらない。警察も捜査をあきらめてしまったという場合、家族が警察に代わって犯人さがしを続けるという記事が、よく新聞に載っている。

犯人は捕まったのに、軽微な判決が下りて、家族としては悔しい思いをする。そこでより重い刑罰を求めて社会運動を展開する。被害者も裁判で発言できるよう法律の改正を求めて、署名運動をする。

その中で、被害者の会や家族の会が生まれる。新たに被害を受けた家族への相談にもものる。立派な「地域デビュー」ではないか。

自身に降りかかってきた災害・事故を、ただ個人的なものとして、個人的に解決していったのでは「社会活動」に発展しない。「これはわが家の問題だけでなく、社会全体の問題だ」と思ったときに、行動も変わってくる。

### ■私的な行為を「社会化」させるセンス

これを「社会化」と言ってみよう。このセンスがあれば、一見、ごく個人的、私的な事柄でも、容易に「社会活動」に広げられるのだ。

米沢市の井上肇さんは、椎間板ヘルニアの手術を受けた時に、「この人はいいい医者だ」と感銘を受けたのだが、お礼をただ「菓子折り」ですませるのでなく、その後

同じ病気で苦しんでいる人に、その医者への紹介状を書いてあげることにした。

といふように、私たちの日々の私的な営みの中に「社会活動」へ広がりうる可能性が含まれているということなのだ。その「社会化」へのポイントをうまく探し出せるかがカギになる。

## ■シニアパワーもセルフヘルプ・グループとして見直したら？

シニアパワーといった言葉がよく使われる。「まだ若者には負けないぞ」と、その元気さを誇示するのもいいのだが、高齢になれば、否応なく様々な変化が出てくるのは仕方のないことである。

それよりは、シニアになるにしたがって生じるさまざまな問題を自分たちでどのように解決できるのか、同じシニアたちでどのように行動したらいいのか、解決できない場合、どのように社会にアピールしていったらいいのか、といったことを一緒に考えていくことの方が現実的かもしれない。

シニアグループのリーダーたちに、このテーマについて考えてもらったら、意外なことがわかってきた。

彼等にはたくさんの、共通の悩み事があることが判明したのだが、それと共に、その解決に仲間のいろいろな力が役に立つことが分かったのだ。そこが、今までたくさんの社会経験をしてきたシニアの強味なのである。

だから、社会や地域のためにどんな貢献ができるのかと問うだけでなく、自分たちシニアの共通な課題を自分たちで協同で解決していこうと考える方が、より現実的ではないか。そしてその解決行動の中で積み上げたノウハウを、他のシニアに「おすそ分け」すれば、立派な社会行動になる。

## ■「大きな自分事」という発想を持てば

今の問題意識をさらに広げれば、ただのシニアの問題にとどまらず、高齢者という世代が置かれている問題、その高齢者への社会の保健福祉的な対応にかかわる問題にも、目を向けていっていい。

早い話が、定年退職して痛感することは何か。自分が無用の者のように見えてくるということだろう。そう思う自身も問題だが、よく考えたらそう思わせる社会も問題だと分かる。高齢者になったらもう役に立つ存在ではないといった見方が社会全体を覆っている。「俺はまだ働ける」と主張してもダメである。そういう社会の見

方を変えていく必要がある。

同じようにして、要介護になったら老人ホームに入ることになるが、実際に自分が老人ホームに入所しているところをイメージできるだろうか。「俺は入らない」と思っているに違いない。つまり現実から目を背けているのだ。今の福祉体制が、そのサービスを受ける人のプライドを守るようにはなっていないからである。

しかし、いずれはそうしたサービスを受けることになる。だからそのことについて今からしっかり考え、そして「利用者のプライドを守るサービス」づくりへ行動を開始するのだ。